

学校の祝祭についての考察

— 学芸会と第2次世界大戦敗戦後の童謡 —

Notes on School Festivities

— Gakugeikai and Children's Songs after the World War II —

佐々木 正 昭*

Abstract

After World War II, many children's songs that were not allowed during the war for being "sentimental" and "effeminate" began to be sung at various occasions at elementary schools such as school plays, concerts, and ceremonies. Children's songs hit their peak from 1955 to 1965 after World War II, for during that time, poets and young composers made efforts to make good children's songs, and such songs were often broadcasted on radio programs for children. Since the 1960s, however, children came to be attracted to the songs of young TV stars and commercials, and the popularity of children's songs gradually waned. Nowadays, children's songs, anime theme songs, and even some popular songs, are sung along side the songs found in music textbooks at elementary school plays, concerts, and ceremonies.

キーワード：学芸会、音楽会、童謡、第2次世界大戦敗戦後

はじめに

第2次世界大戦敗戦後、童謡は大正期以来の第2の興隆期を迎える。本稿では、敗戦後から現代までの童謡の歴史を概観した上で、この時期の童謡と学校教育ならびに学芸会との関連について述べる。

1 敗戦直後の音楽状況

敗戦の虚脱感と解放感の中で、大衆の心を捉えたのは、「リンゴの唄」（サトウ・ハチロー作詞・万城目正作曲・歌、並木路子・霧島昇、以下、紙幅の都合上、作詞者・作曲者・歌手は省略）だった。「リンゴの唄」は、GHQ 検閲の第1号として1945（昭和20）年10月11日に封切られた松竹映画「そよ風」の主題歌で、この歌が、それまでもっぱら空襲警報と大本営発表の戦果を流していた NHK ラジオから放送されると、たちまち人々の心を掴んだのである。その一方で、藤原歌劇団・長門歌劇団のオペラ公演にも観客がつかめた。流行歌と西洋クラシック音楽の双方が、音楽に飢えていた人々の心を掴ん

だのであり、「音楽は、腹を満たしはしませんが、心を満たす力はあるのです」¹⁾という言葉通りの状況が出現していたのである。昭和初期、レコード会社の企画・製作・宣伝販売というレコード資本のシステムが、ラジオ放送と連携して歌謡曲が作られていたが、戦後もその形が踏襲された。戦前の日本には、すでにジャズ、タンゴ、シャンソン、ルンバ、ハワイアンなどのポピュラー音楽が流入し、それらの音楽をもとにした和製曲やカバー曲が氾濫していたが、これらをもとにして戦後多様な音楽がおこり、歌謡曲も黄金時代を迎えるのである。敗戦直後の主な流行歌には、次のようなものがある。「東京の花売り娘」「かえり船」（1946年）、「東京ブギウギ」「山小屋の灯」（1947年）、「あこがれのハワイ航路」「湯の町エレジー」「異国の丘」（1948年）、「青い山脈」「銀座カンカン娘」「長崎の鐘」「悲しき口笛」（1949年）²⁾。

2 戦後の童謡の略史

戦後の童謡（子どもの歌）は、まずラジオとレ

* Masaaki SASAKI 教育学部教授

1) 團伊玖磨『日本人と西洋音楽—異文化との出会い—』日本放送出版協会、1997年、173頁。

2) 伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉編『日本の詩歌 別巻、日本歌唱集』中央公論社、1968年初版、1979年新訂版、366-367頁、413頁。菊池清磨『日本流行歌変遷史』、論創社、2008年、101頁、108頁、111-126頁。

コード、やがてテレビと連携して発展していくが、次にその展開の経緯をみておく³⁾。

(1) レコード童謡の隆盛

①海沼實の活躍

昭和初期の童謡の作曲界は、本居長世、中山晋平、弘田龍太郎の世代から草川信、河村光陽らに移行しつつあったところに、海沼實や山口保治らの新世代の童謡作曲家が登場していた。戦時下では、東京から多くの作曲家や合唱団員が疎開していく中で、河村光陽が率いる小鳩会（戦時下は、富士少国民合唱団）と海沼の音羽ゆりかご会（戦時下は、音羽少国民合唱団）がラジオ放送による活動を継続していた。なかでも戦中、戦後に活躍したのは、戦前「お猿のかごや」「あの子はたあれ」「ちんから峠」（1939年）「からすの赤ちゃん」（1941年）などを作曲し、レコード童謡作曲家の地位を不動のものにしていた、海沼實である。

敗戦を迎えると、海沼は、「見てござる」（1945年10月）「里の秋」（戦時下で作られた斎藤信夫作詞「星月夜」を改作、1945年12月）「みかんの花咲く丘」（ラジオ番組「空の劇場」のテーマソング、1946年8月）「夢のお馬車」（1947年）など、次々とヒット曲を放った。敗戦直後は、海沼のこのような曲とともに、戦前の「かわいい魚屋さん」「リンゴのひとりごと」などの大衆的童謡が、ラジオ放送とレコード化によって広まり、子どもたちはもちろん、生活に疲れた大人たちをも慰めたのである⁴⁾。

②レコード童謡少女歌手の輩出

敗戦後には少女童謡歌手や少年少女合唱団の活躍で、ラジオの童謡放送が全盛期を迎えた。すなわち川田正子、孝子、美智子などの戦前からの童謡歌手に加えて、コロムビアは松島トモコ、安田祥子、安田章子（後に由紀さおり）、ビクターでは小鳩くるみ、キングでは近藤圭子など、各レコード会社が新たに多くの童謡歌手を世に送り出したのである。これらの少女歌手は童謡を歌うだけでなく、モデルや俳優としてももてはやされた。さらに1949年に、12歳で映画主演デビューした美空ひばりの人気もあって、わが子を童謡歌手にしようとする親が多くなり、レコード会社や放送局が運営する児童合唱団はもちろん、町の児童合唱団も童謡を習いにくる子ど

もたちであふれた。

③文学的童謡の衰退

敗戦直後には、文学的な童謡が良心的な児童雑誌に発表されたが、レコード童謡の流れを継承した、童謡の上述のような傾向によって影が薄くなってしまった。

(2) ラジオ放送と童謡

レコード童謡は、当然商品として売れる童謡を目指したし、1951年に開局したラジオ民間放送局も広告料収入による運営であったから、必然的に大衆や児童迎合の傾向を帯びた。そのような状況の中で、NHK や民間放送の一部では、よい童謡を作り、放送する努力をしていた。次にその例をあげる。

①ラジオ歌謡

1946年5月に「ラジオ歌謡」が、NHK ラジオ第1放送（JOAK）で始まる。「ラジオ歌謡」は、1936年、家族そろってみんなが歌える清潔で明るいヒットソングをラジオから生み出そうとした、日本放送協会独自の企画「国民歌謡」が元になっている。「国民歌謡」からは「椰子の実」「隣組」「海ゆかば」などの愛唱歌が生まれたが、「国民歌謡」は、1940年ころから戦意昂揚や思想統制の道具になってしまった。戦後の「ラジオ歌謡」は、その初心に戻ることを目指して始められた番組である。第1作は、1946年「風はそよかぜ」で、それ以後「朝はどこから」「三日月娘」「あざみの歌」「山小舎の灯^{やまごや ともしび}」「さくら貝の歌」「森の水車」「雪の降る町を」（ラジオドラマ挿入歌、1954年2月）「夏の思い出」（「ラジオ歌謡」が夏の歌を放送するために作った曲。1949年）など、現在も叙情歌として親しまれている作品が数多く発表、放送された。1960年代になるとテレビ時代になり、「ラジオ歌謡」も1962年に終了し、テレビの「みんなのうた」に引き継がれた。

②NHK ラジオ「みんなであそびましょう」（2年目より「あそびましょう」）

湯山昭は、この番組の音楽を1961年より5年間担当した。「おはなしゆびさん」（1962年）「山のワルツ」（1964年）など、香山美子とのコンビによる名曲が多数放送される。

③ラジオホームドラマの主題歌

敗戦後、ラジオでホームドラマが始まると、娯楽

3) 以下の敗戦後の童謡の略史は、とくに次の2書を参考に纏めたものである。この両書については、細かく引用箇所を記さない。上笙一郎編『日本童謡事典』東京堂出版、2005年、畑中圭一『日本の童謡 誕生から90年の歩み』平凡社、2007年。また、ウィキペディアも参照、引用したが、これも細かく注をつけない。

4) 海沼実『最後の童謡作曲家 海沼實の生涯』ノースランド出版、2009年。

の少なかつた時代ゆえに人気を博し、そのテーマソングが子どもたちにも広まった。最初の人気曲は、1947年7月5日から1950年12月29日まで約3年半放送された、人気ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の主題歌「とんがり帽子」であった。このテーマソングの放送にあたっては、録音技術がまだ十分発達していなかったために、海沼が率いる音羽ゆりかご会が毎回生放送で担当した。その他に人気を博したテーマソングには、次のようなものがある。

「向こう三軒両隣り」(1947年7月1日-1948年4月10日放送) 主題歌「いきな燕も」、「新諸国物語」全5編、第2編「笛吹童子」(1953年1月5日-同年12月31日放送)の主題歌「笛吹童子」(1954年、中村錦之助・東千代介で映画化、児童向き時代劇の幕開けの役割)、第3編「紅孔雀」(1954年1月4日-同年12月31日放送)の主題歌「まだ見ぬ国」(別名「紅孔雀」)など。「やん坊・にん坊・とん坊」(1954年4月11日-1958年3月31日放送)の主題歌「ヤン坊・ニン坊・トン坊」、「1丁目1番地」(1957年4月1日-1965年4月2日放送)の主題歌「1丁目1番地」⁵⁾。

④うたのおばさん

「うたのおばさん」は、1949年8月1日から1964年4月4日まで約15年間、NHK ラジオ第1放送で、平日の午前8時45分から9時まで放送されていた幼児向けの歌番組である。敗戦直後の貧しい時代に、歌は重要な娯楽の一つだったが、流行歌には子どもの歌唱にふさわしくないものも多く、子どものための健全な音楽文化育成を目的として、この番組が制作された。この番組は、GHQの民間情報教育局の指示によって作られた番組で、内容もアメリカの人気番組「シンギング・レディ」をそのまま翻案したものである。松田トシと安西愛子が起用され、2人がピアノ伴奏で歌うとともに、歌遊びや歌唱指導もあり、従来の少女歌手が歌うレコード童謡とは違う、本格的な歌曲としての童謡を放送した。番組中の「うたのコーナー」では、サトウハチロー、小林純一、佐藤義美、まど・みちお、関根栄一、藤田圭雄、野上彰らの詩に、新進気鋭の作曲家、中田喜直、芥川也寸志、團伊玖磨らが次々と新しい歌を提供し、音楽性豊かな幼児向け童謡が誕生した。この番組によって「幼児童謡」という新しいジャンルが生

まれ、また若い作曲家が育ったのである。この番組によって大正期の「第1の童謡の黄金時代」と並ぶ「第2の黄金時代」が出現したが、1960年代になると、テレビの普及によってラジオの聴取者が激減したため1964年に終了し、テレビの「おかあさんといっしょ(うたのおねえさん)」に引き継がれることになった。「うたのおばさん」で作曲・放送された主な曲には、次のようなものがある。「かわいいかくれんぼ」(1951年1月放送)、「みつばちぶんぶん」(1951年)、「ぞうさん」(1952年)、「サッチャン」(うたのおばさん松田トシが、1959年10周年記念リサイタルに際して、依頼した新曲)。

⑤ NHK ラジオ番組「幼児の時間」

「幼児の時間」は、戦前から同名の番組があり、開始は1942年4月で、1943年から1945年の間は中絶、敗戦後の開始は1947年(?)で1956年3月末に終了している⁶⁾。敗戦直後の少女歌手による大衆童謡のブームが去ったあと、芸術系の童謡は勢いを失い、幼児のために作られた幼児童謡だけがすぐれた作品を生み出した。この番組で発表された主な曲には、次のようなものがある。「おつかいありさん」(1950年6月)、「めだかの学校」(1951年3月、NHK ラジオ番組「幼児の時間」のコーナー「歌のおけいこ」で発表。同年4月「うたのおばさん」で安西が歌い、安西によるレコードも発売される。このレコードの裏面には「かわいいかくれんぼ」(1951年)が収録されていた。「めだかの学校」は発表当初は不評だった。「おはなしゆびさん」(1962年「幼児の時間」の一部「あそびましょ」という遊戯紹介の時間のために作られた歌)、「手をたたきましょう」(「幼児の時間」の中の「リズム遊び」に使用するために便宜的に作られた曲。アメリカの幼児教育の場でよく使われていた曲に、日本の幼児にあうように小林純一が歌詞を改作、中田喜直が編曲した。1952年)、「ドロップスのうた」(「幼児の時間」よりの依頼曲。まど みちお作詞、大中恩の曲を得て放送。1962年)。

⑥ ABC 子どもの歌

大阪朝日放送ラジオの「ABC子どもの歌」は、1955年から1966年まで12年間にわたって放送された。月曜日から金曜日まで毎日放送され、毎月2編の新作童謡を発表した。それらの中から「アイスク

5) 海沼実『童謡 心に残る歌とその時代』日本放送出版協会、2003年、225-233頁。

6) NHK 放送博物館調べ、2010年8月24日、筆者の電話での問い合わせによる回答による。

リームの歌」(1960年)「バスの歌」(1962年)「早口ことばのうた」(1965?年)、「びわ」(1953年)「月火水木金土日のうた」などの童謡が誕生した。番組担当者の中に阪田寛夫がいた。

(3) 新しい子どもの歌創作運動—レコード童謡の否定—

1955(昭和30)年ごろになると、NHKのラジオ放送や「キンダーブック」などの幼児絵本の世界では、子どもが興味を持つとともに、教育的かつ音楽的にも質の高い童謡が求められていた。このような雰囲気の中で、童謡詩人や音楽家のあいだに、レコード童謡のようなものではなく、実際の子どもの気持ちに沿った芸術的な子どもの歌を作ろうとの機運が高まり、次々とグループが結成された。とくに若い作曲家たちが積極的に創作し、叙情的な歌や幼児の歌が続々と作られた。次に、これらのグループのうちの主要なものをあげる。

①「子どもの歌声」運動

1955年には「子どもの歌声運動」が詩人・作曲家・評論家・演奏家・教師などによって提起され、特に日本児童文学者協会の詩人たちが中心になってこの運動を推進したが、そのねらいは子どもの現実から遊離してしまった大正期童謡の流れを断ち切り「新たな子どもの歌」を創造することにあった。1955年6月、小林純一は、「子どもの歌声」運動の発足にあたって、次のように述べている。「これから創造する歌は—新しい創作方法を持つには、まず最大公約数的に過去を否定することだ。過去の子どもの歌「童謡」ということばの持つ概念化された子どもの歌の衣装を、一どさっぱりとぬぎすてよう。いわゆる「童話」の持つ形式化、形式化からくる発想の類型性、慣用的な死語、お可愛らしさ・・・そういうものをふりすてて、もっと子どもの生活に密着した語感、発想、自由な形式を持たなければ、新しい運動にふさわしい歌は生まれてこない⁷⁾。小林は復刊後の「赤い鳥」の第4期の投稿詩人である。しかし、小林はここでは「童謡」という言葉ではなく、「子どもの歌」という言葉を使用して、大正期の童謡を否定しようとしている。これは、このころの小林がNHKの「歌のおばさん」や「リズムあそび」に関わるなかで、幼児童謡という新たな童謡を生み出したという自信があったことによるものであ

る。しかし、この運動は、具体的な成果を挙げることができずに、数年後には消滅した。

②木曜会

詩人のサトウハチローは、1950年頃「童謡復興運動」を提唱して活発な童謡製作を行っており、そのもとに友人の藤田圭雄、野上彰などが毎週木曜日に集まっていた。1955年頃から、従来からの藤田、野上に加えて若い人たちも集うようになり、これがやがて「木曜会」として20世紀後半最大級の童謡創作同人組織となり、ここから多くの著名な童謡詩人が育った。同会の童謡同人誌「木曜手帖」は、従来の勉強誌を発展させ、謄写版刷りを活版刷りにして、1957年4月20日に創刊され、その後月刊で50年間刊行されたが、2006年6月、通巻600号をもって終刊となった。

③「ら・て・れ」の会

「ら・て・れ」の会の名称は、ラジオ、テレビ、レコードの頭文字をとったものであり、都築益世を中心に「自分たちの自由な発表機関がほしい」という、童謡詩人の声に応じて作られた童謡創作の会である。1956年に結成され、翌年6月1日、同人誌「ら・て・れ」を創刊している。その代表的詩人は、都築益世の他、小島秀一、安藤徇之介である。創刊の辞に、「「ら・て・れ」を、子どもの文化財として、意義ある仕事に発展させたい」とある。会の名称からも分かるように、この会は純粋芸術としての童謡ではなく、ラジオ、テレビ、レコードというメディアに乗るような童謡を目指した。同人誌は、童謡の作詩の発表を主としたが、当時登場しつつあった若い作曲家の協力により毎号数曲の童謡曲譜を載せ、また短文の童謡論や回想を載せている。創刊から7年後、1964年5月、通巻33号で終刊した。ただし別冊が2冊あるので、発行総数は35冊である。

④ろばの会

ろばの会は、ラジオ「うたのおばさん」を支えた主要な5人の作曲家によって、1955年7月に結成された。「いい詩にいい曲をつけ、子どもたちのために創ろう」と、作曲家磯部俣が中田喜直を尋ねて実現したもので、メンバーは、磯部、中田と中田の兄の中田一次、大中恩、宇賀神光利(浅草オペラで活躍した指揮者宇賀神光男の長男)である。1956年9月「ろばの会」の呼びかけに、サトウハチロー、ま

7) 小林純一「新しい子どもの歌の胎動—「子どもの歌声」運動の発足にあたって—」1955年6月、児童文学者協会発行『日本児童文学』(特集「子どもの歌声運動」創刊号、1955年8月、3頁。

ど・みちお、野上彰、与田準一らが応えて『新しいこどものうた』第1集を刊行した。これには「とまと」「ちいさい秋みつけた」が入っている。曲譜集刊行のほか、演唱會やレコードによっても作品を発表した。1957年9月27日に「ろばの会」第1回公演を銀座ガスホールで開催し、第2回以降の新作発表会には、伊藤京子、友竹正則、岡村喬生、真理ヨシコ、ダーク・ダックス、ポニー・ジャックスなどが出演している。2000年3月25日、「結成45周年・ろばの会さよならコンサート」を日比谷公会堂で開催して解散した。『新しいこどものうた』は第5集まで出版されており、そのなかに「サっちゃん」（前出）「ドロップスのうた」（前出）「赤ちゃんライオン」などがある。

⑤6の会

「6の会」は1963年に結成された。おうち・やすゆき、こわせ・たまみ、阪田寛夫、荘司武、関根栄一、鶴見正夫の6人の童謡詩人のグループである。この会は、歌われる童謡を目指し、音楽性を重んじた詩を書くことを心がけた。おうち・やすゆきによると、「6の会」は、詩集の刊行を否定し、作曲家と手を組んで解散までの11年間に、6回のリサイタル、2枚のLP、3冊の楽譜出版と、直接、社会に提供する活動を続け」という。

(3) テレビと童謡

1959年ころから、テレビが一般に普及し始めるが、テレビはラジオに代わって、たちまちマスメディアの主役に躍り出た。これに伴い童謡を含む歌番組も、ラジオ番組からテレビ番組へと急速に移っていった。次にテレビの子ども向け番組の主だったものをあげる。

① NHK「うたのえほん」

「うたのえほん」は、幼児向けのテレビ番組として1961年4月から1966年3月までNHK総合テレビで放映された番組で、若い詩人や作曲家を起用して新しい幼児の歌の創造と普及に力を注いだ。内容はうたのおねえさんによる楽しい歌と、体操のおにいさんによる体操の2つである。1966年からは「おかあさんといっしょ」に併合され、現在の「うた」と「たいそう」コーナーの源流となる。「あめふりくまのこ」（1962年）「ドロップスのうた」（前出）「北風小僧の寒太郎」「おもちゃのチャチャチャ」（1962年）などが放送された。

② みんなのうた

「みんなのうた」は、「うたのえほん」と同様、1961年4月から放送が開始され、現在もなお放映中で、2011年には50周年を迎えるNHKを代表する長寿番組である。これまでに1200曲を超える歌が紹介、放映されている。「うたのえほん」が幼児向けであったのに対し、「みんなのうた」は小学校中学年から中学生までを対象にして制作されている。初期は既存の童謡や、外国の民謡を日本語に翻案した作品が多かったが、1970年代後半頃からは、「みんなのうた」のために書き下ろされたオリジナル曲が中心となっている。歌に合わせてアニメや写真などの映像を流すなど、歌番組に新機軸を出すとともに、新曲については作詩・作曲に新人を大胆に起用した。この番組からは、最初の曲「おお牧場はみどり」を始め、次のような曲が放映された。「夕日がせなかをおしてくる」（1968年）、「南の島のハメハメ大王」「山口さんちのツトム君」（1976年）、「サラマンドラ」「切手のないおくりもの」（1978年）、「ビューティフル・ネーム」（1979年）、「一円玉の旅がらす」（1990年）、「WAになっておどろう～イレイエ～」（1997年）、「おしりかじり虫」（2007年）。

③ テレビドラマの主題歌

テレビドラマの主題歌では、1958年から1年半、KRTV（後のTBS）で放映された番組「月光仮面」の「月光仮面は誰でしょう」が絶大な人気を集めた。これに続いて1960年代には、「鉄腕アトム」「オバケのQ太郎」「ゲゲゲの鬼太郎」「巨人の星」「アタックNo.1」「ひょっこりひょうたん島」「ムーミン」といったドラマの主題歌が、子どもたちに広く口ずさまれ、その後70年代から80年代にかけても、引き続きドラマの主題歌が人気を得た。

(4) 日本童謡協会

日本童謡協会は、1969年4月に設立された。初代会長は、サトウハチロー（第2代会長は、中田喜直、第3代会長は湯山昭）で、会の目的として童謡の振興発展を図ること、童謡著作者の生活権および著作権を擁護すること、音楽文化の向上に寄与することなどが謳われた。1989年から社団法人日本童謡協会となり、今日に至る。会員数は詩人、作曲家合わせて400名を超えている。日本童謡協会は、批評家や研究者を入会させず、作品の鋭い批評にも踏み込まず、「職能擁護的な会」の色合いが強い。協会の主な事業としては、次のようなものがある。

① 「日本童謡賞」などの選定・贈呈

1971年から作詩、作曲、演奏など童謡に関わるすべての業績を対象に、「日本童謡賞」「同特別賞」を贈呈。これに加えて1989年からは「サトウハチロー記念賞」、2002年からは「童謡文化賞」が創設されている。

②童謡集「こどものうた」の刊行

1977年から毎年1冊、詩人会員の新作アンソロジーを発行。

③「童謡祭」の開催

1978年から毎年1回、会員の新作による演奏会を「童謡祭」として開催。

④童謡の日の制定

1984年、毎年7月1日（「赤い鳥」の創刊日）を童謡の日とすることに決定。

⑥全国童謡歌唱コンクールなどの共催

(a) たつの市での作詩・作曲コンクール

1984年、三木露風の故郷兵庫県龍野市（現、たつの市）が同市を「童謡の里」と決め、日本童謡協会と協力して作詩・作曲のコンクールを始める。優秀作品に「三木露風賞」の贈呈を制定、入選作品発表のコンサートも開催。この新作の募集は今も行われている（現在は作詩だけである）。

(b) 全国童謡歌唱コンクール

1986年、日本公文教育研究会と日本童謡協会の共同提唱によって「全国童謡歌唱コンクール」が熊本市で開催される。第2回以降は全国規模のコンクールになる。

(d) サトウハチロー記念「おかあさんの詩」全国コンクール

1998年から岩手県北上市、日本童謡協会、サトウハチロー記念館等と共催で、サトウハチロー記念「おかあさんの詩」全国コンクールを開催⁸⁾。

3 敗戦後の童謡の盛衰

以上のように、敗戦直後には、海沼實を中心としたレコードとラジオ放送とが連携したいわゆる「レコード童謡」が復興し、広く人口に膾炙した。「レコード童謡」という言葉には、すでに軽蔑の響きがあるが、やがて1955（昭和30）年頃になると、それまで童謡界をリードしてきた海沼實、中山晋平、河村光陽、山口保治らの作品が、「幼稚な歌詞」を持

つ「子どもの歌謡曲」「営利目的の「レコード童謡」」として厳しく批判されるようになり、また、童謡という用語そのものも過去の遺物として、これを否定して新しい子どもの歌をつくろうという動きが起こる。その先鋒は、たとえば小林純一の「子どもの歌声運動」であったが、小林の運動が十分な成果をあげなかったのに対し、とくに具体的な成果をあげたのは、「ろばの会」に結集した新進気鋭の作曲家たちであった。ろばの会では、「童謡」という言葉を嫌って、もっぱら「(新しい) こどものうた」としたが、それは従来の「(レコード) 童謡」に対決する姿勢を強く打ち出そうとしたからである⁹⁾。また、「ろばの会」の会員ではなかったが、「うたのおばさん」を通して童謡の作曲に深く関わった團伊玖磨も、次のように述べている。「戦後、私たちがNHK「うたのおばさん」を舞台に新しい子どもの歌を作り始めたとき、あえて童謡という言葉を使わなかったのは、戦前のレコード童謡への反発があったからでした¹⁰⁾。しかし、このレコード童謡への反発と否定は、正当な部分はもちろんあったが、このあと童謡が迎った歴史を見ると、あらゆる改革運動が激しいものであるほどそうであるように、行き過ぎのところがあったと言わざるを得ない。

このように従来の童謡に対する批判を梃子にした活動が、第2の童謡黄金期といわれる戦後童謡（子どもの歌）の興隆の原動力となるのであるが、その最盛期については、識者によって多少幅がある。たとえば、藤田圭雄は、戦後童謡の最興隆期を1951（昭和26）年から、この1969（昭和44）年頃までとして、次のように述べている。「「めだかの学校」や「みつばちぶんぶん」が生まれた昭和26年から、この昭和44年頃までが、戦後の童謡の興隆期だったといえましょう。そしてそれ以後、童謡はだんだん下火になって来ました¹¹⁾。また、畑中は、昭和32（1957）年から昭和35（1960）年にかけての数年間が童謡の最盛期で、その中でも昭和32（1957）が最も重要な年であったとして、次のように述べる。「1957年は第2次世界大戦直後の混乱と模索の時期をくぐり抜けて、童謡の新たな動きが始まったけじめの年であった。すなわち「木曜手帖」「ら・て・れ」という本格的な童謡同人誌がこの年に刊行さ

8) 牛山剛『夏がくれば思い出す 評伝 中田喜直』第6章 日本童謡協会 新潮社、2009年。

9) 牛山剛、同上書、145頁、畑中圭一『日本の童謡 誕生から90年の歩み』、平凡社、2007年、302頁。

10) 團伊玖磨『日本人と西洋音楽 異文化との出会い』NHK 人間大学テキスト、日本放送協会、平成9年、139頁。

11) 藤田圭雄監修・解説『日本童謡史』解説、1981年、日本コロムビア製造・発売、28頁。

れ、それとは対照的なかたちで、大正期から1945年までの童謡の集大成ともいべき与田準一編「日本童謡集」が刊行された。さらにこの翌年、1958年には谷川俊太郎が雑誌「母の友」に童謡を書きはじめ、59年には初期の代表作「ひとくいどじんのサムサム」「おうさまはしんだ」を発表した。同年、阪田寛夫の「サッチャン」も発表されており、57年から60年にかけての数期間は戦後童謡がひとときわ輝いた時期であった¹²⁾。実は、戦後の童謡が最盛期を迎える1955（昭和30）年の手前の1953（昭和28）年からNHKのテレビ放送が始まっており、1959年ころからのテレビの普及とともに、人々の関心がラジオ番組からテレビ番組に移っていき、それに合わせて童謡の衰退が始まっているのである。日本童謡協会は、まさに童謡の衰退が始まる1969年4月に、童謡の再興を期して設立されている。日本童謡協会の名称は、同会が「赤い鳥」の志とその運動を引き継ごうとしたからであるが、この会の設立メンバーには小林純一や中田喜直など、「童謡」という用語の使用に反対していた人々もいた。こうした人々は、「童謡」という言葉の入った会の名称に違和感があるはずであったが、「ろばの会」で最後まで「童謡」に抵抗したのは大中恩だけであった。その大中も2004年には「童謡文化賞」を受賞している¹³⁾。

このように新しい子どもの歌を含む童謡が衰退したのは、テレビの出現と普及が大きい、新しい子どもの歌を含む童謡そのものの在り方にも原因があった。レコード童謡を批判して数多く作られた子どものうたは、大人の鑑賞にも耐えるものを意図したこともあって、叙情的で芸術性の高いものや幼児向けの名曲を生んだが、「これらの歌は、たしかに「レコード童謡」のおとなびた甘ったるさや煽情性のない清純さをもっているが、しかし子どもの生命である野生——それは一歩あやまれば低俗になるが、生命的な躍動欲求をみだす力をもっている——にあふれたものはまだあらわれていない¹⁴⁾」と園部三郎が記しているように、新しい子どもの歌は、大人が子どもによかれと思って与えた歌であり、教育的な歌の域内に止まっていたところがある。

ABCラジオ放送の童謡製作者で、のちに従兄弟の大中恩に励まされて「さっちゃん」の歌詞を書き、「6の会」の会員でもあった阪田寛夫は、「昭和30年代——とりわけNHKテレビの本格的な放映が始まったの4、5年間は、詩でも、まど・みちお、佐藤義美の活躍で芸術派童謡の黄金時代だった」として次のように述べている。「『6の会』の実践綱領を鶴見正夫が昭和42年はじめ雑誌『日本児童文学』に書いた。（中略）だがこの時すでに、我々が目指す「音と結びつけた表現」（実践綱領の1）の、その音の方が知らない間に根っこから変動を始めていた。日本の中の音楽の地殻変動につらなって童謡の世界でも、音楽上の進歩史観に乗っかって私たちが永遠に続くと思いついていた、日本語と深く結びついたアカデミックな音楽主流の時代は、たとえば「おもちゃのチャチャチャ」という曲の大流行を遠い烽火のようにして、滔々たるポップスの流れにとって代わられて行くのだが、——自律性を目指そうとした我々が、実は大雪崩に乗った熊の子のようなものだったと気がついたのは、ずっと後のことで、歌詞で言えばリズム優先のまさに自律性のうすい童謡の奔流から、私たち自身も取り残されて行った¹⁵⁾。

「おもちゃのチャチャチャ」は、1962年8月「うたのえほん」で発表されたもので、この曲は幼児たちに圧倒的な支持を得たが、教育者や父母は「不真面目なリズムである」として反発した¹⁶⁾。この曲は、敗戦直後の詩曲ともに哀調を帯びた童謡や、その後の叙情的・芸術的な子どもの歌の概念を打ち破る、リズムを主体にした新しいスタイルの曲であった。このようなりズム感があってインパクトのある曲は、阪田が述べるように、従来の新しい子どもの歌の作り手には想定外であり、従来の童謡が限りなく発展するという進歩史観を打ち砕くものであったのである。やがてこのような曲が、アイドル歌手の歌、アニメソング、CMソングとして子どもの歌の世界を席卷していくのである。

テレビの歌番組においては、ハンドマイクが登場すると、アクションをつけ、見せる要素を当初から計算して新曲が作られるようになった。いわゆる

12) 畑中圭一、同上書、308頁。

13) 牛山剛、同上書、146-147頁。海沼実『最後の童謡作曲家 海沼実の生涯』174-180頁。

14) 伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉編『日本の詩歌 別巻、日本歌唱集』367-368頁（筆者は園部三郎）。

15) 阪田寛夫「童謡作家への弔辞（童謡最終講座、1995年9月12日・96年8月15日東京中野宝仙寺）」『童謡の天体』新橋社、1996年、所収、275-276頁。

16) 上笙一郎編『日本童謡事典』、83-84。

「歌振り」というアクションが本格化したのは、1972年の山本リンダの「どうにもとまらない」からである。そして76年に登場したピンク・レディーは、歌詞・曲、衣装、振付をすべてパッケージにして演じた。72年からスタートしたオーディション番組「スター誕生」は12年間続き、ここから森昌子、桜田淳子、山口百恵がスカウトされ、3人とも15歳だったことから「花の中3トリオ」として売り出されてアイドル・ブームを作った。一方、少年のアイドルは、新御三家といわれた西城秀樹、野口五郎、郷ひろみであった。長田暁二はこのような傾向について、次のように述べている。「こうしたアイドルが成立したのは、音楽ユーザーが低年齢化したためである。音楽ユーザーの低年齢化により、童謡歌手が完全に息の根を止められ、子どもたちはアイドルやアニメの歌に熱中したのである」¹⁷⁾。

4 童謡と学校教育

以上、戦後の童謡の歴史を概観したが、次に学校教育と童謡について述べる。

(1) 童謡の教科書掲載と共通教材

①童謡の教科書掲載

1947(昭和22)年の『学習指導要領音楽編(試案)』において音楽教育の目標は「音楽美の理解・感得を行い、これによって高い美的情操と豊かな人間性を養う」と明記され、内容は、歌唱、器楽、創作、鑑賞およびそれらの活動のための基礎的知識や技能の修得とされた。このように音楽教育は、軍国主義的な歌謡や音楽から大幅に改訂されたが、童謡に関して大きな変化は、1947年、文部省著作教科書に童謡が掲載されたことである。これは大正期には「気品のないもの」¹⁸⁾とされ、戦時期には「感傷的」で「女々しい」として真っ先に排除された童謡が¹⁹⁾、公然と正規の学校教育に取り入れられたという点で画期的なことであった。その曲目と学年は次の通りである。

「くつがなる」「どんぐりコロコロ」(2年生のおんがく)「夕やけこやけ」(3年生のおんがく)「しよ

うじょうじのためきばやし」(4年生の音楽)「赤とんぼ」(5年生の音楽)「歌をわすれたカナリヤ」(6年生の音楽)²⁰⁾

②共通教材としての童謡

『学習指導要領音楽編』は、1951年、さらに1958年に改訂されたが、1958年改訂の『学習指導要領』の大きな特色は、各学年で取り扱われなければならない、歌唱および鑑賞共通教材が設定されたことである。このとき小学校共通教材とされた童謡は、第4学年に「赤とんぼ」で、さらに1977年の改訂時には、第2学年に「夕やけこやけ」、第4学年に「とんび」が指定されている(両曲とも1989年、1998年、2008年の改訂においても継続して共通教材)²¹⁾。なお、2008年3月告示の『中学校学習指導要領』では、「赤とんぼ」「荒城の月」「早春賦」「夏の思い出」「花」「花の街」「浜辺の歌」が歌唱用共通教材として、各学年ごとに1曲以上を含めることとされている。これらの曲は、「我が国で長く歌われ親しまれている歌曲のうち、我が国の自然や四季の美しさを感じ取れるもの又は我が国の文化や日本語のもつ美しさを味わえるもの」(第2(4)イ(ア))という基準で選ばれたものだが、これらの曲がすべて、いわゆる文部省唱歌ではないのが興味深い²²⁾。

5 学芸会と童謡

(1) 学芸会の復活と教育課程への組み入れ

敗戦後、占領軍の民主化政策によって、日本の教育はアメリカ式の新教育に、大きく転換した。子どもの心理と自発性が尊重され、社会科や国語の教材、題材を劇化して学習する方法が奨励されたこともあって、学校劇がさかんになり、これに伴って学芸会も復活した。戦時中の「芸能錬成会」「学芸修練会」「興亜少年大会」「打ちてしまぬ学芸会」などという名称はなくなり、再び「学芸会」と呼ばれるようになって²³⁾、「小学校の学芸会、中・高等学校の文化祭は運動会とならぶ最も大きな恒例学校行事であると同時に、その地域社会においても関心の深い行事の一つ」²⁴⁾となったのである。

17) 長田暁二『歌でつづる20世紀～あの歌が流れていた頃』ヤマハミュージックメディア、2003年、206-207頁。

18) 伊藤信吉・伊藤整・井上靖・山本健吉編『日本の詩歌 別巻、日本歌唱集』、367頁。

19) 海沼實『童謡 心に残る歌とその時代』152頁。

20) 海後宗臣編『日本教科書大系 近代編』第25巻 唱歌、講談社、1965年、656頁。

21) 滋賀大学附属図書館編著『近代日本の教科書のあゆみ—明治期から現代まで—』サンライズ出版、2006年、162頁。

22) 文部科学省『中学校学習指導要領—平成20年3月告示』「第5節音楽 第3指導計画の作成と内容の取扱い2(1)」、東山書房、2008年、77頁。

23) 日本学校劇連盟編『学芸会の事典』、厚德社、1954年、30頁(筆者は富田博之)。

学芸会は、明治時代以降、第2次世界大戦敗戦前までは、教育課程外の活動であった。敗戦後、1951年版の学習指導要領の一般編と小学校の「教科以外の活動」の内容例として、「学芸会」があがっており、これによって学芸会が初めて正規の教育課程として位置づけられたことになる（中学校・高等学校では「特別教育活動」の名称である）。1958年の学習指導要領改訂においては、小学校の教育課程が、各教科、道徳、特別教育活動、学校行事等、中学校は、必修教科、選択教科、道徳、特別教育活動、学校行事等となり、学芸会は「学校行事等」の内容の1つ「学芸的行事」に入ることになる（ただし、具体的内容として、学芸会があがっているわけではない）。その後、小学校では1968年から「特別活動」（中学校は翌年）と名称が変更になり、「学校行事等」が「学校行事」として、特別活動に組み入れられたので、学芸会は特別活動の「学校行事」の内容の1つ「学芸的行事」に位置づけられることになる。さらに、2008年の改訂で、小学校、中学校ともに、「学芸的行事」は「文化的行事」と改められている²⁵⁾。

（2）学芸会と童謡

学芸会は、昭和20（1945）年から昭和30（1955）年代にかけて最盛期を迎えている。とくに昭和30年代は児童数が多かったこともあって、学芸会（学習発表会）を3日から5日もかけて行っている学校もある。そのなかで童謡はどのような取り扱いを受けたのであろうか。教科書に採択されたもの、とくに共通教材は、当然学芸会に限らず歌われたし、その他の童謡も戦前のような厳しい規制はないので、かなり自由であった。1946年には、学芸会で児童に自由に歌を歌わせる企画をしたところ、児童が当時の流行歌「リンゴの歌」を次々に壇上に立って、歌ったという記録がある²⁶⁾。また、1948年京都市立春日小学校の学芸会では、4年「斉唱砂山・村のかじや」3年「遊戯里の秋」の演目があり、童謡それも「レコード童謡」が歌われている²⁷⁾。さらに1954年発刊の日本学校劇連盟編『学芸会の事典』には、資料と

しての学芸会のための学校劇脚本中に「まちぼうけ」をバントマイムに脚色した無言劇がある。「3曲」とあるから音楽として童謡を使用したものと思われる。さらに、この書には、学芸会の音楽の参考書として、加藤省吾編『日本童謡百曲集』1-3、加藤省吾編『昭和童謡百曲集』、山口保治編『かなりや童謡傑作集』、海沼實編『ゆりかご童謡名作集』、海沼實編『ラジオ子供音楽会愛唱101曲集』、庄野正典『現代童謡110曲集』第1-2編、山本芳樹編『世界童謡名曲集』があがっており²⁸⁾、加藤省吾、山口保治、海沼實のいわゆる「レコード童謡」の曲も学芸会での使用対象とされていたことが分かる。時代が下がって、1985年京都市の小学校の全校音楽会の曲目には、「あの青い空のように」「おぼけなんてないさ」「小さい秋みつけた」「友だちっていいな」「今日の日はさようなら」などが入っているし、1988年には、京都市の小学校の創立30周年記念学芸会で、歌「友だち賛歌」（全員）笛の演奏「里の秋」（5・6年）、歌と笛「大きな歌」（全員）歌「手のひらを太陽に」（全員）の演目の事例がある²⁹⁾。ここに見られるように、戦後は、教科としての音楽においても比較的自由に歌が選ばれるとともに、学芸会や音楽会は、音楽の教科よりもさらに自由度が高かったために、学芸会や音楽会においては、CMソングや流行歌は一応の制限があるものの、過去の童謡はもちろん「みんなのうた」やアニメソングなどもかなり自由に歌われてきている。たとえば宮崎駿監督のアニメ映画「となりのトトロ」「もののけ姫」「崖の上のポニョ」の主題歌や歌謡曲でも「世界でひとつだけの花」などは、学芸会、音楽会だけではなく、交歓会など学校教育の多くの場面で、歌われたり演奏されたりしているのである。

おわりに

以上、戦後の童謡の略史と学校教育との関係、とくに学芸会との関係について述べた。童謡はラジオ・テレビというマスメディアならびにレコードと

24) 学校行事の手びき作成委員会編『学校行事の手びき』京都市教育委員発行、1957年、22頁。

25) 文部科学省『小学校学習指導要領—平成20年3月告示』「第6章 特別活動、[学校行事] 2(2)」東山書房、2008年、東京書籍、114頁。

文部科学省『中学校学習指導要領—平成20年3月告示』、東山書房、2008年、119頁。

26) 小林つや江「学校音楽の甦生（その1）」東京高等師範学校附属国民学校内初等教育研究会編纂『教育研究』復刊第5号、1946年11月1日、35頁。

27) 京都学校歴史博物館所蔵春日小学校写真帳による

28) 日本学校劇連盟編『学芸会の事典』国土社、1954年、497頁、517-518頁。

29) 京都市教育委員会編集発行『閉校記念誌 待賢一輝ける128年のあゆみ—』1999年、58頁、京都市立花園小学校創立30周年記念実行事業委員会編集・発行『花園小学校創立30周年記念誌』1990年、34頁。

深い関わりを持ちながら発展してきた。現代では、さらに1980年代に登場したテレビゲームとその音楽、そしてインターネットと携帯電話の普及によって、童謡を取り巻く状況は大きく変化してきている。また日本のアニメとその音楽がクールとして諸外国に評価される時代でもある。刺激の強いリズムや映像との組み合わせによる音楽が子どもたちを魅了しており、音楽の多様化と音楽の趣向の個性化の傾向とも相俟って、童謡は唱歌とともにますます懐古的な時代遅れのものとなりつつある。近年のレコード童謡に輪をかけた商業主義的に乗った大衆迎

合的な音楽の氾濫のなかで、これまで日本童謡協会やNHKの「みんなのうた」が、一定の矜持を持って芸術的な児童歌曲の創造と普及に尽した功績は大きいと言わなければならない³⁰⁾。というのも過去の遺産を引き継ぎながら、現代の子どもたちにも親しみやすく、大人にも安心して歌えるような、現代の国民歌謡とでも言うべき歌が、時代を超えて求められているからである。また、現在では学芸会そのものも、その意義と役割が問われているが、これについては稿を改めることにする。

30) 上笙一郎編『日本童謡事典』、300頁。